

古事記に学ぶ その 23

渡来人・神功皇后 そして応神の御世の終わり

前号(古事記に学ぶ その 22)では、15代応神天皇から16代への承継について述べた。

古事記では、次の章で突然時代を遡った話として「新羅からの渡来人と天皇の系譜とのつながり」について、過去に遡って述べている。読んでいて少々混乱してしまうが、古事記原文でもこんな書き出しになっている。

又昔、有新羅國主之子、名謂天之日矛、是人參渡來也

<1> 天之日矛(あめのひぼこ)と赤い玉

この時代よりも昔のこと、新羅の国王の子に●天之日矛(あめのひぼこ)と言う者がいた。

天之日矛(あめのひぼこ)は海を渡って我が国へ来た。

新羅の國に一つの沼があって、その名を阿具奴摩(あぐぬま)と言った。この沼の岸辺で一人の賤しい女が昼寝をしていた。すると日の光が虹のように、その女の陰处(ほと)をさした。

これをまた、一人の賤しい男が見て、不思議なこともあるものだと思って、その後しばらく女の様子を探り続けた。すると、この女は身重になり、ついに赤い玉を生んだ。

男は玉をもらい受けて、いつも大事に包んで腰にぶら下げていた。

この男は山の谷間で田を作る百姓だったので、耕作に使っている百姓たちのために飲み物や食べ物を牛の背中に乗せて谷へ運んでいた。

すると山の中で天之日矛(あめのひぼこ)に出会った。天之日矛は百姓に尋ねた。

「お前は どうして飲み物や食べ物を牛の背に乗せて谷の中にまで運んでいるのか？ お前はきっとこの牛を殺して食うつもりなのだろう」そしてこの男を捕らえて牢に入れようとした。

男はその問いにこう答えた。「ただ、百姓たちのために食べ物を運んでいただけです」

なかなかこれを聞き入れてもらえず、腰に構えていた玉を解いて賄賂のつもりで渡した。

国王の子、天之日矛はこの一品で男を許してやることにした。

天之日矛が、男から手に入れた赤い玉を持ち帰って床に飾っておくと、その玉がいつの間にか美しい乙女になった。天之日矛はこの乙女と一夜を共にして、正妻とした。

乙女は、常日頃珍しい料理を作ったりして夫にまめまめしくかしづいたので、天之日矛の方もだんだん態度が大きくなってきて、やがて罵るようになってきた。すると乙女は、

「私はあなたの妻になる筈の女ではありません。私は日の光から生まれたのですから、私の母の國へ参ります」と言って、こっそり小さな船に乗り、海を渡って逃げてしまった。

<2> 逃げた妻を追って渡来した天之日矛は・・・

そして難波に来てそこに留まった。これは難波(なにわ)の比売碁曾社(ひめぐそのやしろ)にいる

●阿迦流比売(あかるひめ)と言う神である。

＊比売碁曾社(ひめぐそのやしろ)

<https://yahoo.jp/z2ZJZB>

現在の比売許曾神社と言われている。大阪環状線の鶴橋駅から北東へわずかの所にある。妻が逃げたことを知った天之日矛は、追いかけて海を渡り難波に行こうとしたが、難波の海峡の神が立ちはだかった。天之日矛は仕方なく、戻って多遲摩(たちま)の國に船を停めて、この地に留まった。

そして、多遲摩の●俣尾(またお)の娘である●前津見(まえつみ)を妻として、●多遲摩母呂須玖(たちまもろすく)・●多遲摩比多訶(たちまひたか)・●清日子(きよひこ)の三柱を生んだ。

多遲摩母呂須玖の子は●多遲摩斐泥(たちまひね)、その子は●多遲摩比那良岐(たちまひならき)、その子は●多遲摩毛理(たちまもり)と言った。

清日子が●当摩之咩斐(たぎまのめひ)を妻として、●酢鹿之諸男(すがのもろを:兄)・●菅竈由良度美(すがかまゆらどみ:妹)を生んだ。

多遲摩比多訶は、姪の菅竈由良度美(すがかまゆらどみ)を妻として、●葛城之高額比売命(かつらぎのたかぬかひめのみこと)を生んだ。葛城之高額比売命は、息長帯比売命(おきながたらしひめのみこと)のちの神功皇后の母親である。

この天之日矛が海を越えて持ち込んだ物は以下の八種の宝物だった。

*玉津宝(たまつたから)=緒に貫いた珠(二つ)

*振波比礼(なみふるひれ)=波を起こす魔法のひれ

*切波比礼(きりなみひれ)=波を鎮める魔法のひれ

*振風比礼(かぜふるひれ)=風を起こす魔法のひれ

*切風比礼(かぜきるひれ)=波を鎮める魔法のひれ

*奥津鏡(おきつかがみ)=航海の安全を守るもの

*辺津鏡(へつかがみ)=航海の安全を守るもの

これらは伊豆志(いずし)の社に祀られた八座の大神である。伊豆志は現在の兵庫県豊岡市出石町と言い伝えられており、出石神社に宝物が祀られているとのこと。出石神社は但馬の國一宮として、地元根付いている。<https://yahoo.jp/URJqy3>

ここまでの筋書きを、系図としてまとめて見ると、渡来人「天之日矛」と天皇の系図との関係が見えてきた。神功皇后が渡来人の血筋(天之日矛の曾孫)であることが明らかになった。

<3> 春の神と秋の神のいさかい

この伊豆志の大神の娘である●伊豆志袁登売神(いずしをとめのかみ)がいた。この乙女を妻にしたいと考える神が80人もいた。

秋山に紅葉が色づくのを名にした●秋山之下氷壮夫(あきやまのしたびおとこ:兄)と、春の山に霞がたなびくのを名にした●春山之霞壮夫(はるやまのかすみをとこ:弟)の兄弟がいた。

兄は弟に向かってこう言った。

「私は伊豆志袁登売神を妻にしたいと思っているが、思い通りにならない。お前ならできるかな？」

弟は「おあいご用で」と答えたが、兄はこれを嘲笑って、「お前がこの乙女を手に入れることができたなら、俺は素っ裸になって身長を量り、自分と同じ身の丈の甕を用意して酒を醸し、山や川のあらゆる産物を集めてお前に捧げると約束しても良い。神に誓う賭け(うれずく)をしても良い。」と豪語した。

弟は、ここまでのやりとりを母親に報告した。すると母親は、藤の蔓を取ってきて、衣・袴・沓下・沓から弓矢に至るまでを一晩で作り上げて、弟に持たせて伊豆志袁登売神の家に行かせた。

すると、着ているすべての物に藤の花が咲いた。そして花の咲いた弓矢を乙女の厠の傍に立てかけておいた。乙女は気づいてこれを自分の部屋に持ち込んだが、この時弟(春山之霞壮夫)は乙女の部屋と一緒に入り、乙女と一夜をともした。そしてそのことを兄に報告したが、兄は心中穏やかではなく、約束したことは一つも守らないので、弟は母親に一部始終を報告した。

母親は、神に誓う言葉を口にしたにも関わらず何もしない兄を呪う儀式を行った。

兄の体は干からびて萎びてしまい病気になってしまった。8年の歳月を経て、兄は許しを請い、母はこれ

を受けて呪いを解く儀式を行った。兄は、また元通りの健康な体に戻った。

<4> 応神天皇のしめくくり

この、品陀和気命（ほむだわけのみこと：15代応神天皇）と息長眞若中比売の間に生まれた若沼毛二俣王（わかぬけふたまたのみこ）は、母親（息長眞若中比売）の妹である●百師木伊呂弁（ももしきいろべ）・別名●弟日売眞若比売命（おとひめまわかひこのみこと）を妻として、●大郎子（おおいらつこ）・別名●意富富杼王（おおほどのみこ）、●忍坂之中津比売命（おさかのおおなかつひめのみこと）、●田井之中比売（たいのなかつひめ）、●田宮之中比売（たみやのなかつひめ）、●藤原之琴節郎女（ふじわらのことふしのいらつめ）、●取売王（とりめのみこ）、●沙禰王（さねのみこ）の七柱を生んだ。

意富富杼王（おおほどのみこ）は、三國の君・波多の君・息長の君・坂田の酒人の君・山道（やまじ）の君・筑紫の米多（めた）の君・布勢の君などの祖先である。

また、品陀和気命（15代応神天皇）と中日売命の間に生まれた根鳥命（ねとりのみこと）は、異母妹の●阿具知能三腹郎女（あぐちのみはらのいらつめ）を妻として、●中日子王（なかつひこのみこ）・●伊和島王（いわしまのみこ）の二柱を生んだ。

●堅石王（かたしわのみこ）の子は、●久奴王（くぬのみこ）である。

ここで突然「堅石王（かたしわのみこ）」と言う耳慣れない名前が登場して戸惑ってしまった。別な資料や情報を確認して見たら、応神天皇と迦具漏比売（かぐろひめ）の間に生まれた「迦多遲王（かたちのみこ）」のことだとわかった。（次頁 系図上の⑨）

品陀和気命（15代応神天皇）は130歳で他界した。陵は河内の國、恵賀の裳伏（もふせ）の岡にある。現在の地図で見ると、羽曳野市誉田（こんだ）である。 <https://yahoo.jp/5ocS6E>

以上

*次頁資料：「応神天皇を中心とした系図と渡来人との接点」参照

*参照資料： 古事記原文 https://www.seisaku.bz/kojiki_index.html

応神天皇を中心とした系図と渡来人との接点

